

緑茶が血液凝固系・線溶系因子に及ぼす影響

○三浦有美、篠原奈穂、鈴木洋一、関 泰一郎、有賀豊彦
(日大生資料・農化)

【目的】

近年、緑茶及び緑茶成分の様々な薬理作用が明らかにされつつある。本研究では緑茶摂取が血液の流動性に及ぼす影響を明らかにする目的で、緑茶が血液凝固・線溶系因子に及ぼす影響をin vitroで検討したので報告する。

【方法】

緑茶30gに80℃の蒸留水1ℓを加えて30分静置し、緑茶抽出液（以下緑茶）を得た。凝固系に及ぼす緑茶の影響については、ウサギ血漿もしくはウシ精製fibrinogenを用いたfibrin clot形成モデルにより評価した。線溶系に及ぼす影響はplasminogen activator, plasmin活性をfibrin plate法、zymographyにより測定し、評価した。

【結果】

緑茶はthrombinによるfibrinogenのfibrinへの変換をほとんど阻害しなかった。しかしながら緑茶存在下で形成されたfibrinは8M尿素に溶解することや、SDS-PAGEによる解析から、XIII因子による架橋反応が阻害されていることが明らかになった。また緑茶はplasminogen activator, plasminなどの線溶系因子の活性を阻害する傾向を示した。現在緑茶摂取が血液の流動性に及ぼす影響についてin vivoで解析を行っている。

・
・
・